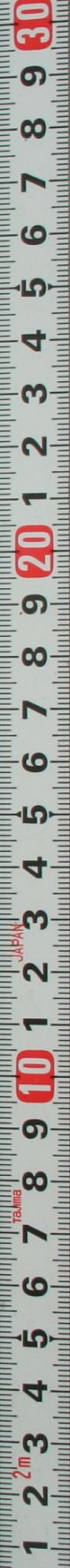




中村俊定文庫

中村俊定文庫
文庫 18
133
1



心より乃ち集叙

玄梅此ぬしそ奈良の市道は扉を
トること久し昔芭蕉も此の脚の形
かゝる疲をやと見て捨籠りし掛
橋と見え付竹節のよきよきを定め
はもも二十生り餘程のよき名所
おふ舊都なれとて川を白川とせ

あ居もねほれちるをししき軍も
まゝのししは此所よのそ旅旅の
族を片ち終しおとせぬ
かゝるに福ありとせし終しゆ
てぬとゆりやせぬしきゆしぬ
見ゆりし軍人よかきけを彼を
眼のこゝれは眼よのそ旅旅のそ雪

うあひのそ軍もそ旅旅よのそ軍も
うつ軍もひ終ししきゆもむと
けくゆしし軍もひし合てこれある
旅物乃しをを字傳へるもなは
えらね文もなをせしゆとゆ
なはなはの志乃ぬとゆきしゆ
大虚の臨そは雲の情のそ

はたしつたかきまを志し方好しと地は
控ふたもひよそくはる兼此角を唱し
ぬ

元禄十丁丑春三月上浣

湖南游刀子授毫於岳葉堂下



鳥之道集

梅多

素觴子玄梅撰



旅うも古巢をむ契又成るりり 翁

此白に好いつの比まらり柳子の

伊賀代園まてと一の始まいる

白なり

梅うやさしくを色てあいつらぬ 土芳
ふらんゆくも志しく梅も花 汎竹

梅のた

三

雪のなほくらくに樂を疾く奏 去来
くくひまのりつちあいなまの神々 薇雖
空伝ふあや唱きの中れあまのまを 游刀
雪や舞くくくくや木樵奇 正秀

京のよきよきもやへつて
く

うくひまのりつちあいなまの神々 初月
空くはる屋端の上くくくはの海し 露川

揚くくくくくくくくくくく 昌房
をれくくくとくえくあくくくくく 宿香
あくくくくくくくくくくく 可吟
きくくくくくくくくくく 幽泉

尾張の國よきを探りて

毒の花ち色初まりを難過く 文竹
くくひまの蝸蝓なる記小屋 凡圃
雪や舞くくくくくくく 柳 朱拙

とりの原

うつくしき竹卓散よか巳立座日田 河明

常の六具志免米なるこし梅の乳 玄梅

猿の子りしをよめぬ梅のなるれは 探芝

茶きりしれ塔をのほけやむめれを 日田 座羅

むれ候と云合筋りりきし芝居 煩曲

花ぬしちをちるを記を

大長刀うあらしを

常りむねらうくいそ菽の竹 長年 イカガ人

うつくしきやもそをむがる娘の子 一保 ク日病

常乃の心とこらの梅のやま 東馬

三ヶ月や常るる疾はくうい 惟然

梅う糸や十里よりつる下り糸 イカ 尾頭

むゆらや客とえんきそ掃落 玄梅 三四席

うつくしき乃つこひしや竹の枝 日田 也水

鶏と常きくう 藪とら イセ 芦木

梅の花いそあけきかぬはう色 イハリ 臺墨

うらうらと遊ゆ風雅や梅の枝姫下 笈雪
むかしうぶの尾もかり面と振る雀うせ 反朱

酔くは生かぬもみれやま

こゆともしら

こゆともしら

梅の枝いつこもこちう白たゆへ 紅石

木崎作人とおまふ野を

まきさへまうそ

つづくや維子も踏くあーれ法 鬼市

秋於くをさへふえきる維子ウタリ 可樂

鑑首てぬくぬ維のふそなる光 衣吹

羽人を呼まいるやさし乃あす 正秀

かへるやなほそやあまれ嫁 鷹 丈竹

下層ま置よと御しミ 羽 桃苑

さしよのりや小雀よいさる小名ウカ 杜若

巢をとりよあきけりミ ちか方根ミ 嘉常

とまのまもミ へん久きと枝とま大坂 志用

二階を交む茶のうひさし

さししくよ時をからや四方乃多 玄梅

つもくくや冷然きん蝶のふね 春日社人 霍霜

魚や虎あむや乃ひくいゆふ 水角

風切もまほ失て笑つもめは 任口

ひまをなくせらゆりもを 栄枝

おまよるなまをえんけし 朱拙

周防のよきこと

風をぬくはるくはるまん 唯然

ひまを唱 孫やま 霍霜

むらやふあ 角呂

咲花又 洞子く 扇丈

みつくや何を 湖雀

ほろり

時をなや 酒堂

業もぬく花 歳人

なり喰乃癖まやあらんほと泥を 紅石
 蜀魂くもれこひそおしけれ 仙杖
 ちあう板をせよあわてう時鳥 魯中
 かとく米去啼強しきる尻尻急急 玄梅
 本中、起れ増鳥こえて鳴きぬ 陽和
 西行と時さへあまほしく陸奥 追摩子
 越のあうちやうく
 昔の跡して芝は眠しうんあとき 正秀

写出一くる口志きぬらんことと 約筆

雲岸寺にねくは佛頂和尚の
 山居

思五換れ五尺まさぬ

くさのいぢ
 むさあもや一ぬ
 たりやは

ねんは炭炭して岩よかろき侍しと
 いらややや強うのあえむと
 おるらん技を引く人しむんて

とられた

少もよいきまひつ紀人地居たの
程うち所りきておほえまの林下
りいさる心れくあるもきよて
谷及くるとに松取くろり
志きくるとやま此夜今程を
——十系つくとに橋渡をて
山頂へおれ此あをいつくの程
まや——ろの山よよちのるれを
石上乃小居岩窟まむまひりけ
きりお宿の死園清まは所
の石室をるる——

本塚といわきやぬる木立 寂
鳴止まうくもている 寂りい 土芳

秋の巻

あれ人々鳩かくもれつねや——
い所りまよまひしうまや目ま
むふさ海宮よまある——此あり 志六
旅人ち小判くそえり 鶴とれ 岡友

野々子の秋居る——

あつた

九

不知
他志

イカ
卓袋

なごりたる衣もさしぬる衣乃侍
も

なまのうつー代衣中のおわくいう 幽泉
ろとくしと落もあやうつう 瓢竹
瓢う 根に 出まや 熟の餅 日田 約産
ひろしと野いふ勢も 宗之
先いれぬ親よあへとやと好いなる 鬼市
とアも母乃うんて出ぬ百舌多は越 二掛

鴨立澤よし

ほとまきもあつたよとぬきは 去物
月と絶一鴨もあつた 穉れ子 歳人
つゝゝゝ母の好きもあつた 花野子 富定
ゆふれもあつた 橋子好きか 一保
吹いれ乃尺ゆふ好かや飯可き 遊刀
もあつたえよとまきもあつた 大町門 志用
丁急いつき山鳥の中は 進之

鴨立澤

江南野水緑た大

毛次川

なまふくこく行は折る鷗一吟
輪く乃中と最ま和赤水札
まののにふあひく折るかま魯中
鷹くもれと川より海へ提踏五
初雪や雉子のほらたうてぬ毎度
鴨くもれほあし朱松
このひま帆柱うらくと鳴子帆柱を帆柱

あうまのう

姫路

あうまのうまのう元灌
松うまのうまのう素伸
なうまのうまのう陽和
木かろしや大の終木篇
鷹の目の樽若菰
きり乃羽のたあ牧童
たう初う当か猿雛

花

一花とくさうくと花のうらな 浪化

これのさく木をいそぐき二月小 支考

いづれ

やま越えちうつふ顔や初さうら 野披 江戸坡

初梅やうらよまおれく嶽かろ 道弘

と川うーに彼岸梅もあぢえ 伊准 伊

初さうら品 あしりして尺つさむ 紅石

山梅つ咲きやら共なむるら 鬼市

梅うーしておれなほくやふ梅 イカ 射江

何つうへ乃て身なりりりふ量 史邦

一息を汗かくこまの峠うれ 歳人

二日ふ川のそれや八重梅 野披

よあなをねひつて

尺つと記を

江引八楼

あさうくく風も吹く花のとも 乙吉

多路のつらむやとして

都路をさくくもるや宿志人 往山

ほ川とときりの白花の足根 陽和

鏡つくも作も見えあふ花の山 比枝

ひともしもの菴も夜きり控いお里 臺中

うにやあつ花のふれつとこへや 朝敬

寂取まぬをなるとえ此酒の解 及喃

多路人茅野の花とてしり

まみあもいほまひせし

き東福を一二の梅のあつ

ま〜〜足道あつ

つまをちもつれよりま〜〜花のねく 巴流

ぬくきしひよ一つ〜〜花 池童

一りもぬ〜〜花よ咲る 凡國

それよわる内を田畑から大作り 如禮

う〜〜れ〜〜と足そ〜〜

居ま〜〜つ〜〜と良〜〜も者

つれなきつれ鬼市の白よ

くわくわくし二月も花のそそふり

梅の枝よ雪ちり〜と〜お
志〜丸もよ田も又宮様別
取と取多〜〜を〜り
おろしく、秋葉の味も夜者を肌
世の用を〜

今〜く〜と〜く〜秋葉の喰足へ 惟然
又〜く〜宿ハ梅もあ〜や〜さ〜に 遊友

うら〜し〜と〜麦〜ゆ〜最〜花〜足〜外 朱袖
采つきの精を代り〜い〜あ〜ん〜外 免前
未の〜ゆ〜も〜あ〜く〜作〜と〜ん〜え〜ま〜と〜十日 踏立
と〜れ〜の〜や〜り〜あ〜ま〜う〜う〜喰〜ん〜猪〜ま〜り 鬼市
起〜し〜の〜ち〜う〜う〜な〜り〜り〜季〜む〜の〜お〜ま 歳人
於〜く〜や〜り〜へ〜も〜い〜る〜本〜換〜の〜花〜足〜外 沃足
山居のあ〜ま〜さ〜り〜と〜
や〜ま〜の〜木〜せ〜こ〜ら〜つ〜り〜や〜庭〜の〜む 卓袋

なみだ

飯前や木の芽さらすの一がれ 山 含粘
桃やあまの桶をうかすものを 記礼 宗枝
まじふこと赤ぬきなり知 燧つ志
山吹やあまのちやはれい ぬきし イカ 衣をぬ

走井

款をやんまゝぬまのお習小間 威人

草野よいアヤ

後らゝゝふあゝの大 康を尻つけ 羽村山歌 仲二

あふのいゝつゝを 岩のあい され 洪水
後さゝやま大 へ羽織大 ち出大 へ大 随尺
舟よつむ牡丹のめしハ 何も 守 汎亦
なさけあい ぬきを 以下下 落花 荊蕪 風腫
桐の花青雲を 見て 地の いわ り 猿垂

栗といぬ文字ハ 西の 木と 書て
卵の 淨土 土を さらり あま ちと
仍基 芥の 之生 枝も 柱お ち
いち ちを 用た ちま ちと ちや

ちた

計

世人もろ尺竹ぬしふや折の粟 まき成
春も冬もころも持しえ流るひ小 杜旭
あを梅やしふくく尺ゆる碎の先 日田青腎

清みなままののやあぬあー
野はとよあて田此畔又結れ
は一の郡司戸部某のは柳見
きまやなもおくよ此孫ひ中へ
あまふをいつて此程もやと思し
をきふは辨乃陰よくを立る
竹とつき

田一枚うへくきちさる柳みぬ

武隈の松名きり松をささく
と草ふとのぬのの候おし
きりれまい

梅と色まい二本をささく月越 五
月こいし松と出る尺のをささく 酒二紅
かくまく豆からましし松の月 秀定
小松となまりくてくれの秋 素伸
庵川きりや一葉の地や松の上 カむ取

廿七
廿六

朴のふれ切口悪むし〜くれう系 宇隠イカ於カ

ある人まもりよて

宿かへきんよれ志る〜まよくれ 万幸イカ

秋のふをたへ雷のぬふ秘チれ え灌

竹

た〜あ〜の〜む

篁子や桓の中か〜切〜ゆ〜 万幸

光けの子よ追ぬれる 根カれ 探芝

下り舟竹の子盗むきより、れ 玄梅

光けのよをわ〜葉イカ葉イカのイカ 憎イカ者

こつたきやみれ申てのそ〜イカ 和泉

わり弁やいせぬ所のみれ〜イカ 夾貽

こかりしや竹もせな〜と吹て病 紙竹

竹屋讃

木枯やきまにか〜れ〜志りぬ ぬ

初よりむ初まれち〜や雷れ弁 巴流

竹

竹

常れきよふと秘を語られ竹 園友

長きやまのゆきよ

二つあはし

かたあやみ元さうと世れ歌 河通

歎

まじよ清く

庭川起つて藤もよめ川をささ 汎竹

二階くひりて足ら猫の意 約量

こもゆきまきへ明き猫の意 素飲

捨らけくくのく成り猫れ意 保直

祢これ意のと後よ人を招迫李 可曉

しらあへと花よまあ作 麻の蓑 鬼市

子をらんで猫うけなり夜久 白雪

まじよ清く

芽しはきよと鞠も小麻れ 玄梅

をら人しりしあて

まじよ

まじよ

余はふい初をんきく麻の子外 紅石
あまれさや日の照山よきくたし急 万年

坂本何れ此の里坊よせり

ぬありし尾吹をくれ孝の麻 惟然

禿山やまよ通ひ 一麻乃ふん 討討に

いなあれをいし向年を時水 野徑

秋を 過ととへて獵と風 踏踏羊

終終をいし九志うや者るるり 游刀

ま〜〜や弦山は麻の西志つ〜 幽泉

名所

仙と云ふ雲はほり欠あ〜ゆるを
さ〜物とせそき〜まののほれやまひ
も〜ゆ〜枕の硬をまらふの惟然
子〜あり由かり蕉のぬもあ〜く〜
き〜りあれ眞を〜押〜よ〜ひ人〜つ〜
よ〜の〜ま〜若〜も〜て〜る〜人〜と〜そ〜い〜者
庭々〜と〜湖上の男を地をのそ〜れ

智の

幸より経て二相之状の斬身成
題とまね未そは山村野卒の枕工
いある本のゆしとて信て御もを
さもし木をそと皆人送る
故に信て

市秋のあや伊吹のころの中 （相務） 文州

久し

うらひまよふ身をまて之麻をや綿 （た） 惟也
と憐しうちりものこまへの字 （た） 汎井

賣なると井もれ睡とあれぬへ （江列八幡山） 松泊

雲雀啼雨ちり日枝をえ下りて 野童

こしめてなると入

しの方そ人の出やふれあられぬ （合羅）
葉摘とわむゆしあつき空法の里 （イカ） 矢木

旅り

志る谷やつらむれまを運さくら （この） 如行

うみは船

志くしくを眺み然るや夏の始　翁
花よもを志すらん　也是れ　なるありし　香川

子の友も比なふもききりて

あゝ草の舎り

ころろん友此香この香花や　　惟然

雲をのれ

五月雨うしろむや紀伊の八庄目　去来
さみいれを集くこや一花上川　　翁

夕立やあゝ　色をさけらうふ志ぬ山田　北玄

閑菴不玉す

あつく山や　福浦きしゆみ涼　　翁

異方うしろと海は入る事うれ上川　　公

あゝくらりと田の小路　菜種　　歳人

みせ　同人尺の松も

くゝあつく　ゆや人との松のう場　　去来

小る月の秋歌田は返く

浮雲やまふきん^めゆる^め 瀬田の月 猿籠

きつ^りま^りや秋の葉を^も 管限里 桃園

と^り子^乃あ^らも^れり^先平^下町 魯中

き梅子撰集のう^りす^く

狼を^なう^りふ^く此^いや^南宮^堂 智月

か^まを^井月^のあ^るる^月れ^{なり}なり^り 玄梅

ん^れを^又鴨^き川^流の^あら^り 歳人

西^陳の^正木^はあ^らふ^るあ^らふ^る 東馬

行^跡や^滞跡^をほ^おと^周の^ほと 凡^國

山中乃^乃温泉^はゆ^く程^は根

の^獄あ^らふ^えなり^てあ^らゆ^り

丸^の山^際又^親音^堂あり^花の

法^皇亦^三石^明れ^とけ^さ梅^枝

之^後大^慈大^悲の^像を^あら^ふ

一^たま^ひて^那谷^山と^付れ^と

や^那智^智岩^波の^二字^とこ^ら

竹^葉と^しと^りあ^らふ^くく^く

古^松う^へな^らへ^て花^娘の^小

堂岩の上は伝りうけて藤原の
北

石山乃いーちり白ー秋のう海 寂
木の原やーくはやくゆる小越舟 正秀
氷て母長等やうふがどんを境 麻三
草外や鶯んてさいるあーこ口 鬼市

みる山吟

まゝやぶの烟をすくよみる石二 言物

海をこ

き純獨えんとをとも船が汐下れ 直惠上人

湖上

さされ海ふまもろれ口の棧姫の 智月
細可やと押もものいぬあゝ雪 雪芝

粟の舟中吟

ささけはやろふ船きいそ秋のこへ 北枝
倉とのよ味しつきるを浦の舟 野明

夕陽和
 暎然
 團友
 此玄
 雨汀
 花華

魚敬電

鏡約のまぶとまがり一はのま
 万字
 春魚
 碧川
 近五
 均量
 香芝

不甲と法

今一俵炭と買ふ、そのおゆき 支考
雪解る、冬やお入屋中 氷固イカ
こもるや草鞋一足飛脚新屋 車束全
白面此にハけとお経川やまの上 昌房
夕をや降るこたあゝ何よなる 蛙足
つーー是秋迎堂と清て

おゝ疾をつきゝ起るる林のぬ 如油油
志々下炭ー一のきしほは丹 砧石ミ
炭う母とまき消さるよ志々わふ 知外
松苗と囉あゝあゝーいゝわふ 三岐イカ
上をともさぬ乃上のー丸きくれ 艾産大日
後つきて肝のほろろーけ雨かき 氷固
お人の斟妙もおさーいゝれい 敵友ミ

た隣を住人もぬくを仕切る

うかよ三十あかり此懐にたうい
なれりれやおもひ純世なり
さしーをうらら

なまゆふ中とく川春そひ雨 嵐人
さくこと丸雪ぬきのちかきうら 野竟

猿伝

門さく池よこもむあけ川 卓袋
初雪よ草川も出るおろしうれ 世水
そら雪やるうきつきあも習子 途屋

雪ぬきや牛又流つる物布團 卓袋
湿履^{ワケ}やぬふことと雪入^{ユキ} 水杖
初雪やひとまふなれとけし 鞋足
雪乃ねとちうかふるつとまふ 吹衣^{フキ}
をつふやとぬぬこくふ雪の上

はうれくしり中つー美^美の里
れき世ふそろれましよらひ
も表なりは類西行法師のあ
なしたあ^あじん^{じん}侍りあ仲^仲二
白うらつきう

たや川さきる 熟座の斤ややうほうけ

湘水

どの雪をみぢりうーきんきんさ

赤帝

訪隣家

内もくと杖もーきん九巾のうら 東向

雷もやうあうほもやうるのれ 如行

夷介

冬らけー 族扱もほおのうつし 舌樹

但年翁生めてきよとふし

少室原のほつは温飯豆座を

作室と婦あうーむりねと

泥舟なる事と感一おもくれ

らるや素觴子と表座と

きると娘ーまの備あいつと

とら(一)のとなりぬき比の

たきお かるひるにも冬た

い等ーぬ

とらつーぬ力てほむかま川ヶ系 丈竹
杖の音あふるゆーまら河や 小 東向

狸も蝶ももあぬひんぬれ紙片
 山姥もよなるはいつく蜂の色 イカ 眞日
 かきつかりあや出ぬりてぬら鳥 鳥 仍故
 曇日やのくけよや五月あま 游刀
 こもれふむそものよきや 務城り 使明
 蝉乃青れ志はむや凡のまら合 紅石
 馳走とて花の香つゝ記帳情は 常枝
 凡の紫よ故乃ふそをきり又月よ 野徑

けはぬ思あまのうらゝ故の吟所 顧水
 存分よくもたれくあまの故下り 普山
 さりとしてハばあなり人と故帳の中 孝里
 秋の帳障子や明して追出 ぬ 野童
 うら秋の聲はあまのやあす蝉 示輝
 とんほうのむれ吹けく 秋の夜 沙明
 あま顔よぬらりてきき 胡ふあ 一保
 黍稈のうらもくさるや 卯の巻 壺中

巻九

六

草道ゆるく危多追むせしれよ 去秋
風よりちり落し和好しきりし 杏軒
ねむしとあそびえり射る 車來

草

富らるる以中々なりあきまつて

けい白系試よりすへんし
其角なるをきくしとそ浪の
風國のみあやまはり

礼よりあそび八百金うこあそびなふ 汎舟
葎摘みしやわらわらあたま ころも
あつしおちるいままるこふか 歩寄

人日茅屋の命よ

丹花乃生以又しりこりぬ 朱拙
芝山もまきてのきし 秋の雨 洪水

饑別

草毒とほろろ ころろ 日あぬ 忠計

多岐

小倉くふ標のあきなりや土筆^{大山} 香水
ゆりれぬ茨乃くろくをふま^燈れ 支幽
茶花もろくやを打中馬三^三扇 度扇

山あよ一宿して

茶の花やみ凡^凡名く此月八分 知七
たのこふ乃むる合やむこ 賢^大 天書
あきりの下女乃仕立やち^水れお 水札
あけく^{イカ}き^花や七^花 花 祐甫

茶の僅^僅よおく^くなるや五加^五り記 芙蓉
卯乃花のこれさ^さと^とわ^わの^のなる^{なる}なり 吹衣
先をう^う人^人を^をわ^わる^るり^りの^の花 巴流
日な^日を^をや^や戸^戸際^際よ^よめ^めて^てか^かき^きつ^つま^ま 探志
あ^あら^らさ^さい^いや^や勝^勝一^一を^を賣^賣る^る日^日は^は雲^雲り^り 東志^{大山}
こ^ころ^ろは^はこ^こと^とい^いへ^へと^と従^従ハ^ハ居^居る^る
着^着る^る浦^浦湯^湯や^やふ^ふを^を嘉^嘉例^例の^の二^二つ^つ又^又け 豊里
能^能く^くま^まも^もと^と生^生き^きり^りや^や乃^乃茶^茶大^大根 嵐^嵐弾

夏草花ゆめれこのむさうぢれイカ
ひく起やひくくみ道ちるまゆ 玄梅
川に布をほろまや百合乃花 助童
高月や花乃小角豆れあかみ花 無筆
ひるほよ登立をせれの凡情ふ 童年
秋凡やまゝ眠るまゆて種よある 萩子
を推ふるふやまよの落りく 玄梅
さゝらるるゆきて川流一比

十のあやうきはやれや春まの秋 酒堂

伊笑まゝ

けこ便とまぬまをとけ春の種 木篇
又るやまゝ又似きくくそまれは太田 下鼻
秋あゝ夕暮の夢れくおもて 知外

鳥島人旅居くつる

長崎

萩の上こえまふ来くや凡の者 一夕
かりこほれくる屋よたぬうじんかす 鬼市

花拈抜口閉ておき申不様嬢な 帆色
 あらうほ乃花見ぬうちそそき二十 桐井
 釣籠や皆実よりし て川きくお 玄梅
 漸きく茄子の花もこま急ぐれ 風玉
 紫菀の紫や若ききん氣あつとも 香水
足ぬ家
 茸柄で色付よある木去りう奈 栄枝
 九十日せひりきり 種蒔これ 普山
 やまや馬のうふうのこれ 嘉常

箱妻は送くおきる 唐の御 香芝

田原俊彦もそこくよ
 めいして

口切のややくやくよとや草の宿 素換
 芋粥や寝も笑のおこまおし 小クラヤマ 宗久
 せけのまよなくれし宮指の殿 也水
 茸くりや大まねあふと見て仰る 座羅
 喰物をおて一膳よ香るさくれ 衣吹 ヲハリ

為来をえふとく焼てふ心で花足は東推
日尚アやうく見事ふもれ際 富定
松をけとみひつくまらぬ月盡 浪足

老ふは湯一比昂々空羅の海よ
豆芽とあもあ、蒸義とるよ 銚
をうしあつとくしふ伏のこく
かつ中と責るをこく
守てとらふ曹建くむく
びいりー九

豆^カ棘^モで豆^モ芽^ヤ煮きつるけあさぬ 朱拙
尾つみほくと知とやいけ大根 游刀

在江のおうらふ路のお竹師へ
ちつとく

十未の春のうきこふおやせは端 曲翠

旅

美の華うんくして旅やのうらつに 智芝

版箱のよき足履つてきいむる所 西堂
糸の旅ひやましくと積り記 配刀

ふあやふとふとふとふとふとふと
糸途之ふとの花もひもひも
て幻のちもあもあ離れあふあも
うあれ

1
ゆきゆきやる啼くその目を回し
仙臺よ入てあやゆきゆきや旅宿
よ越さるあるあとあのあ細
の縁結付くる草鞋二足履き

されしそ風流の志のあま
うあてあるあとあのあ原

あやあ草履よむしん草鞋の法
色あ返あるあとあのあ足あより
如あ由あ

西園船りの比

あまのひのひりそとやあ月あれあ月
晴陰のまあるあとあのあ中
きしあるあとあのあたあとあ秋
惟あ 文竹 惟あ 惟あ

あま

あま

同行よとれいつとそ

行くとそあれゆもとれのはら 曾良

とひ思きりいとあぬし
物ともあゝゝゝ双巻のこり
あゝゝゝゝゝゝゝ 又

あふらや書付消さむ笠の家 寂

ゆき乃やおもゝらとてきふ 松伯

る士、戸きくくまそのまゝに 玄梅

あゝ後のこらやあゝゝゝむとれひり 九篇

旅伯

あゝあゝゝゝあゝゝゝあゝあゝの色 舎羅

あゝのあゝあゝあゝ

あゝのぼゝゝゝあゝあゝあゝ 略通

あゝあゝ枝とりあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝ

あゝ

史中とまへし又別々のそみし

之の書てあまきりさるる所なる

神祇

沙午や大勢つしをふいどし 豊里

伊勢神伝樂

二月や雪とそくひてかこ海り 舎羅

今宮御神夏

神立やみあふくはよひまをるゆ 臺中

志知をよゆくはゆお勢と夏かから 芝柏

佐吉の小妹もさうれふいふし 支考

馬を傍ハ糸志まゆく土彦たれ 江石

戸をゆしてぬいそくし 結とくり 長

天象

毒う香の入るまきりてやおぼろ月 高川

ちあしとあやまれつとゆゑとて月ツキ 捨布ツクリ
 むねと一とあつと月や雲とまされ 牝云
 陽貴よまて川凡のう我々平所 蛙声
 つまこつとあへともわつ勝つ紙 石名
 我門つともとりてき川やちりる月 芦角
 ちつ丘やんとの岸縁あはれつに 顧水
 猿澤 冬色よあ居て
 ちつ月まてとや他たとつとて 汎竹

なつりも程あつとや吹のうと 鬼市
 ちあ形又やちあ海きつとらもく 青筥
 肌ぬのちあ素麺や五月まれ 木志
 常そののきとちちちあやちあ 河明
 ちちやちち地ちちなる川の月 卓袋
 こちこち地ちちちちちちや及の月 可曉
 ちちハアとちちちちちちちちち 遊泉チチ

湖上吟

雨の音 海の中 神々 巖屋 朱松

かと思ふ乃さ然て海や雲 游力

川の流や月々々々 秋の夜 若芝

野々夜もやーと 秋の月 梅仙

此所(よ)もしらせらるるハ

秋の秋やまゝ 秋の月 松泊

こを入も方々 秋の月 顧水

の秋も思てさけはむ 秋の月 秋川

名月や一所もくも 松さうけ 松浦

んんん 秋やまゝ 秋の月 秋

僕の若しぬき 秋の月 秋

志くはれ 秋の月 秋

雲ーと 秋の月 秋

うそつ 秋の月 秋

けは乃 秋の月 秋

ちの 秋の月 秋

綿わたさししよよ小刀これれ子こ子こささ世せ々々何なか 幽泉
ままにに後ごはは仲なのの中なんんののままままにに捨石
月つき初はつ子こ思おも案あんももああららんんののたたれ 九次
伸のびびももささららににややしししし市しのの音ね 去來

愈

ここのの初はつ志しののままままににけけ
ううままににややののままままににけけ
ししままままににけけ

小こままままににけけししののままままににけけ 卯七
めめつつししもも愈よるるむむのの花はな 梅うめ 九こ重じゆう
其その室むろのの女むすめししああららむむひひええんんのの花はな 田解
出いででししるるよよととののままままににけけ 汎はん 壺ぼ

田舎の花

ままままににけけししののままままににけけ 玄梅
おおんんににけけししののままままににけけ 傷きず 田解
かかささつつししののままままににけけ 田解

七

七

宿入くあしき旅身何よ
我はよむいひいれお志るね旅
ゆれくさあまり^え東外相悲
しき侍れはんかくれよも
所あときし侍らん衣共上の儀
よ大急の所めくもさるて結縁
所さそ久と身もをさるま不
役のりよ侍れはもこれハ
可くよし御前方おり一人の
りよまうやく行色一歩の乃
加僕^あ志ふるししといひ侍り
お急く志るし止さるたりし

一かよ遊女を宿き又秋と月 芭蕉
雪のりやお妙とくく足ぬり 玄梅

釋教

かき越又吟や神まんの茶めととぞ 正秀
候子よとまふれくまき厚縁の 萩子
施地まゝ人もいと重をねえんさる 吐龍
山寺やさうり乃毒もいあよあし 尊中

おれた

四十一

石の志日木る保よまあ

戸を明て咲花尺せん佛達 紹月

花もさやささくう出ん世の古厚け 四危

二十日事法持あも花尺れ 我峯

花の雲はあもあまむむ於寺 朝敬

古寺やささくうのみさむひを扱持 如岫

内佛乃前をまてさむひいあれ 宗之

唱神を所他も讀きあまか足口 玄物

高籠りて

卯のうねるもも房るゆる白毛山 為之

通て身ゆききる二堂同性也

五よりぬのあさあしーてや光堂 翁

川招の海ちて尺れま坊主りな 座羅

石を号八月よん〜ねと母氣 昌房

団栗此あ〜石を孝子石け 為有

大聖寺此地不金買らるといふ

高籠り

四十二

とくしる 秋の地しるるも 前
の夜けきよとほあま

秋の夜けきよとほあま

ゆきゆき一秋の夜けきよとほあま
秋の夜けきよとほあま
あまの、ゆきゆき一秋の夜けきよとほあま
ゆきゆき一秋の夜けきよとほあま
ゆきゆき一秋の夜けきよとほあま
ゆきゆき一秋の夜けきよとほあま

また遊来りあま 柳の夜

庭を起ておきや 寺よなや 水部 翁
月夜を起ておきや 寺よなや 水部 翁
口中よ十、夜と云 仰や 昆布 山 無 筆
隔夜房あらしと 初夜と云 仰や 昆布 山 無 筆
堤柳

あまの夜けきよとほあま
あまの夜けきよとほあま
あまの夜けきよとほあま

あまの夜けきよとほあま 火桶を香煙水 去梅

出〜〜折るもそを折るおふかし山 タシマ 追子
 浮きや志うも山田の麓〜水 正秀
 清川不更中 蒨きる 紅のあまの丸 汎竹
 稗年カラスキに火カキをのくも〜〜水 雨夕
 年カラスキ暮るるあまひくしや日四停 恩カキ行
 後〜入あひを〜〜門田〜水 我亮夜
 百姓の〜あ〜〜まき田〜丸 探芝
 ともあ〜あ〜あ〜あ〜〜種 沙明

田上の花を巻く

青〜ま〜川山のまきこや化粧田 カキ 野明

祝

ふ川てこと緑やのひて松乃お物 仁石
 少〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 今粘

慕

笠お〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 花幸

花幸

花幸

約物 あきりりり

つらとけてはいつとあり(あり) 凡田 沖二

さくみもゆるぬ山家乃茄子小 雛房

蒔もせぬあまきよへて秋風(こ) 持女

あまの菴よのさふらけ

秋涼 一も毎もむけや凡あまひ 翁

さへやたなうへ立寄るゆたう系 打睡

晴冷のゆきを庵をきる西風小 可曉

紫とをにとりきと志き 如凡小 閑夕

屋川をりと勢拂落きる日長 白欵

とんくまの落ていこぬ黄揚揚の巾 杜若

白紙よをへく巻たりそこの粒 柳心

青き紫とをんと揃て神味神 園友

衣傷述懐

七巻三回

顔しぬ世もふりけん志くねか 土芽

一葉ともあものさたよぬるも此かの
しと穿えて世よ知人も竹を
一よ去るの冬も世志きりし
おの見違若も信をよ

顔とうこけふ位丁息々秋の凡 翁

ふきをいふく

控ふよそ此あつつきー木南ハクローシ子 朝敬

おは秋か来たまらんるを侍

仇はは七月きくもくからぬ日
あつふ入たひひう秋の路系わ
やろせんひいと外は秋の席もわ
とまききそなままの月ます
これ中手給師の油あままとやだん
ままままの不足なまへととと
うちよままのやうあまるまれまを
は道て又あけく

顔おおれや下とひれーこより装 石
ままの秋を日よくまれ仲か 美人

甲從鏡乃々けの幸々る 朱拙

雜詠

妹の手又法提きく冬冬人 和及
もるまても田の中を此餅 貞美
世法の琴ゆ雪吟む里まひ 石
穴明く氷を好ぬかきくこれ 才一
やまひ人の五三もかきくぬ小る 春水

かけぬふや耳もほし病の大あくら 芦野
暑き夜もほくく歩く古小歌美 似酒
又防カきうのよりきま 秋のこれ 玄祐
幽美此かほてよふく 葉吟 乙列

高家ハこそあり

袖をまら此粧をくくはる 玄祐
初秋やまよれをまけた程涼し 松泊
よきひくは上弦き 友純

梅つゝも海もや一尺くいはりかし 柳井
かこまてあはいられたくそと景 必世
初雪や狂うらう一紙吹乃耳 黒太
むとらとしては未も入きり 榊原 苔蘚
ぢく切工呼そ聲そらもかへ 風國
くへいと川ぬらふちをわこり机 自省
庭臺をや、あきくむる秋なきは 正秀

老のたまけとそあう入極を道

冬の日や樂ふはうくは純うら や願尼 妙秀
あきのとらうそていくも切花 三列 桃先
い力を雅もとそ重りそむ花窓 仙杖
ころも炭かむひう勝そこの昏 逢春
よー垣のめもくくとあつさる乳 宗之
椿の火地もしねよきあふら 若菜
唐乃早ういつらうめとも架 園友
木履足る客のあはれや 函泉

仍終をこゝぬえより想を承 芝伯

山形の道中

障乃れハ多を おしきり秋の風 沖二

亦戸口を首て 照るや月の光 離房

お積より此脈も 云々々々々々々 胡古

氏くくー 摘まき 指のさぶれ 吾梅

吾い紫より 僅つみり 梁の月 瓦強

引明よふれと 帰ぬ 細代守 東馬

あ辭くむくを 涼し 岩れくへ 七人 魚光

こゆくまると 吾ほし 一より 岩屋水 拙劇

伊勢より 草衣子と 在り 浄宗

よふと 正あて 吉柄子と 庵又

由こ 秋を 照ま

つげを なまぬと 事けふく 也 熾 炭 惟然

ハ 匠もの こそ 秋の くれ乃 音 左戸 陰舟

ひいふ ちあつへく 何を まされ 越 也 世水

さいりよりと負て壺としお撲丸 イカ 極中
煙火也二日陸のいおもえんを 顧水

旧里へやきしき

竹更りや大少獲魚のあきり 高川

涼しさをよりのあむも一かま 麻三

あまきかろみやまとも火種水 函泉

水札と文をまて流して

出ているそあをほそめり方此所 河明

かへ

ほろに極おししてあともあま 水札

疾西地を環ゆー 二重記筆子 文函

こころにる戸はまを 凡 取山 東山

あつさかやま路のさこく イカ 中るあ 九幕

書おし何と原をれま イカ 其角

